

機関番号：3 2 6 1 2

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：2 0 5 2 0 4 2 4

研究課題名 (和文) 日本語動詞・形容詞の活用・アクセント活用の記述方法の研究

研究課題名 (英文) Conjugation and Accentual Conjugation in Dialects and Historical Variants in Japanese : A Standardized Method for Description.

研究代表者

屋名池 誠 (YANAIKE MAKOTO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00182361

研究成果の概要 (和文): 日本語の動詞・形容詞は、いわゆる「活用」だけでなく、アクセントの面でも語形変化(「アクセント活用」)を行う。日本語の諸方言、諸時代語すべてに適用可能な記述方法として提案した私案(日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』所載の「活用の捉え方」「活用とアクセント」参照)を、特異な活用やアクセント活用を有する方言についての臨地調査と、中世語についての文献調査によって検証し、記述方法私案の有効性を確認することができた。

研究成果の概要 (英文): Japanese verbs and adjectives have not only conjugation, but also inflection in the aspect of accent ('Accentual Conjugation'). I attempted to verify effectiveness of the preliminary plan of a standardized method for description of conjugation and accentual conjugation of Japanese verbs and adjectives in all dialects and historical variants (cf. 'Conjugation', 'Conjugation and Accent' in *Encyclopedia of Japanese Language Education, New Edition.*), by investigating dialects that have unique conjugation, accentual conjugation or previous literatures of Japanese in the Medieval Period.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言

1. 研究開始当初の背景

日本語動詞・形容詞の活用の研究は、江戸時代以来営々と続けられてきているが、諸方言・諸時代語の活用の多様なあり方まで統一的に記述できる記述方法は従来存在していなかった。そのため、諸方言・諸時代語を同じ基準で比較・対照してゆくことができず、系譜関係を再建したり、起源にさかのぼった

りという、より高次のレベルの研究に歩を進めることもできなかった。

また、活用の際にはアクセントも変化するが、これを「アクセント活用」とよぶと、この「アクセント活用」のような形態論レベルの研究には、従来のアクセント研究ではほとんど手がつけられていなかった。

2. 研究の目的

日本語動詞・形容詞の活用・「アクセント活用」の両面について、諸方言・諸時代語すべてに適用可能な記述方法として提案した私案（日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』（大修館書店 2005 年）所載の屋名池誠「活用の捉え方」「活用とアクセント」参照）の有効性を、方言の臨地調査や時代語の文献調査によって検証し、必要ならば改良を加えることを目的とした。

3. 研究の方法

活用・「アクセント活用」それぞれにおいて特異なあり方を有する方言について臨地調査をおこない、記述方法の検証をおこなうとともに、二段活用の一段化や音便形の固定など、動詞活用について画期をなす時期である中世のことばについても文献調査をおこなって、記述方法の精密化につとめた。

(1) 活用・「アクセント活用」についての方言臨地調査

活用について：

- ・ 二段活用を残すと共に、「ラ行五段活用化」も進行している方言（鹿児島・大分中津・佐賀武雄）
 - ・ サ行変格活用動詞の五段活用動詞化が進んでいる方言（青森平内）
 - ・ 特異な音便形を有する方言（奥吉野）
- 「アクセント活用」について：
- ・ 従来「アクセント活用」について詳しい記述のなかった西南九州式アクセントの方言（佐賀武雄・鹿児島）
 - ・ 京阪式アクセント地域に囲まれ孤立している東京式アクセントの地域（奥吉野洞川・土佐清水）

(2) 中世語についての文献調査

二段活用の一段化や音便形の初期の状況を知るために、おもに鎌倉時代に的をしぼり、網羅的な文書集成である『鎌倉遺文』によって調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 方言について

臨地調査をおこなった結果、活用については

- ・ 二段活用の残存とラ行五段活用化について：

九州方言は現代においても二段活用を残しているが、南九州では、複数音節でかつ e で終わる語幹の動詞にのみ二段活用が残り；東九州では、語幹末母音の種類に関わらず、複数音節の語幹の動詞に二段活用が残り；西九州では、語幹の長さに関わらず、e で終わる語幹の動詞に

二段活用が残るといふ、国立国語研究所編『方言文法全国地図』の読図から予想していたあり方（屋名池誠「動詞活用の地域差とその成因・今後の進路」『日本方言研究会第 83 回研究発表会発表原稿集』2006 年）を、南九州（鹿児島）、東九州（大分中津）、西九州（佐賀武雄）で、多数の動詞について確認した。伝統文法では「下～段活用動詞」と「上～段活用動詞」とで動詞の語類を分けているが、これらは母音終わり語幹動詞という同じグループに属するもので別物ではなく、語幹の長さや語幹末の母音の違いによって、方言や時代ごとに見かけ上ちがった振る舞いを示しているだけにすぎないという主張を裏付けることができた。

二段活用動詞は、一段活用活用と同様の i や e でおわる第 1 語幹のほか、u で終わる第 2 語幹をもつ複語幹動詞であり、「二段活用の一段化」とは第 2 語幹を失い単語幹化することであると主張するとともに、二段活用動詞は、活用形指定の前段階で、語幹交替過程をおくことでその語形を適格に産出できるという記述方法を提案していたが（前掲口頭発表）その主張を裏付け、記述方法の有効性を確認することができた。

現在全国各所で起きている二段（一段）活用動詞（母音終わり語幹動詞）の「ラ行五段活用動詞化」といわれる現象は、国立国語研究所編『方言文法全国地図』の読図から、地域によって、そのメカニズムを異にする別種の現象であることが予想されるが、そのうち九州型のものについては、母音終わり語幹と語尾の間の挿入音 r が、語幹末に取り込まれた形態として記述できること（以上、前掲口頭発表）も今回の調査で実地に確認できた。

- ・ サ行変格活用動詞について：
どの方言・時代語にも不規則動詞は例外的存在として多少なりと存在するものではあるが、サ行変格活用動詞のように、すべての方言・時代語を通じて不規則性を示すものは、その不規則性自体が普遍的なのだから、日本語動詞の活用の記述方法を考えるとき、例外視して済ませるわけにはゆかず、その不規則性のよってきたるところを明らかにしなければならない。

サ行変格活用動詞は、複数の語幹を有し、それらが相補的に切り替えられて用いられる動詞であると考えることができ、また、諸方言でのサ行変格活用動詞のふるまいの違いはその複数の語幹を切り替える条件のちがいとして記述できると予想していたが、この予想が成り立つことを複数の方言において確認できた。

・音便について：

サ行イ音便を有する方言であっても、多くの方言ではすべてのサ行五段活用動詞がイ音便を起こすわけではないが、奥吉野の洞川方言は、すべてのサ行五段活用動詞でイ音便が義務的におきるという特異な方言である。この際、多くの動詞が、同じくイ音便を起こすカ行五段活用動詞と同音衝突を起こすことになるが、同方言ではサ行動詞は語尾の先頭子音 t が s に変わることによってカ行動詞との同音衝突を回避していることを発見した(カイサ「貸した」(サ行動詞) カイタ「書いた」(カ行動詞))。

これは、音便形の分布には同音衝突回避が重要な要因となっているという予想(屋名池誠「音便形」

その記述)『築島裕博士古稀記念国語学論集』(汲古書院 1995年)を裏付ける重要な事実であるが、一方、この方言ではガ行五段活用動詞は音便形で撥音便となり、バ行・マ行の五段活用動詞と同音衝突をおこしている。なぜこの場合に限って同音衝突が許されるのか、今後さらに詳しく検討してゆく必要がある。

「アクセント活用」については

・西南九州式二型アクセントの方言の場合

はじめて西南九州式二型アクセントの方言の「アクセント活用」の精密な記述をおこない、西南九州式二型アクセントの「アクセント活用」は、語幹の+ - のアクセント素性と語尾の潜在的なアクセント核位置で記述される現代東京式アクセントや京阪式アクセントの諸方言(屋名池誠「上方ことばのアクセント」『上方の文化 上方ことばの今昔』(和泉書院 1992年))、平安時代京都方言(屋名池誠「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8巻2号 2004年)などとは異なり、現代隠岐の三型アクセント方言(屋名池誠「動詞のアクセント活用

」日本音声学学会第311回例会口頭発表 2005年)などと同様、語幹の+ - のアクセント素性のみによって記述できること、すなわち「アクセント活用」の記述方法の私案の枠内で記述できることを確認した。

- ・京阪式アクセント地域に囲まれ孤立している東京式アクセントの場合
京阪式アクセント地域に囲まれ孤立している東京式アクセントの地域である、奥吉野洞川の「アクセント活用」も東京などと同様の方法で記述できることを確認した。

(2) 中世語について

おもに『鎌倉遺文』によって調査をおこなった結果、中央方言の音便形の固定過程において、イ音便・ウ音便のような二重母音化の音便と、促音便・撥音便のような重子音化の音便とは、その性格を異にし、二大別する必要があること、その固定化の時期も異なることをほぼ明らかにすることができた。

(3) 本研究の目的は記述方法の検証であるが、従来、活用・「アクセント活用」についての記述のなかった方言について活用・「アクセント活用」の精密な記述をおこない、データを集積することができたことは第1の成果である。

これらの調査の結果、活用・「アクセント活用」ともに、記述方法の私案が、特異な特徴を有する方言・時代語にも適用可能であることが明らかになった。当該の記述方法が諸方言・諸時代語を通じ適用可能であることをほぼ検証することができたわけで、所期の研究目的はほぼ達成したといえる。

(4) ただ、今後の課題として残った点も多い。

- ・いわゆる「ラ行五段活用化」について：
九州諸方言とその機構を異にする別の現象であることが国立国語研究所編『方言文法全国地図』の読図から予想されている、東海地方などの諸方言(屋名池誠「動詞活用の地域差とその成因・今後の進路」『日本方言研究会第83回研究発表会発表原稿集』2006年)については今回は臨地調査をおこなっておらず、今後精密な記述調査をおこなう必要がある。

・不規則動詞について：

今回、サ行変格活用動詞については、諸方言の中でももっとも特異なあり方(五段活用動詞化)をしている青森平内方言を調査できたが、今後その他の諸方言のデータを広く収集することで、複数語幹の切り替え条件を網羅し、方言・時代を超えた一般的

なスケールを作成することをめざしたい。力行変格活用動詞についても、複数語幹の切り替えの条件が諸方言の差異を生み出しているといえるのかどうか、言えとすればこれについても一般的なスケールをたてるか、そのスケールはサ行変格活用動詞のものと同じものなのかを調査してゆく必要がある。

・音便形について：

特異な音便形を有する方言（出雲方言など）を精査し、同音衝突回避との関係をさらに検討・分析してゆく必要がある。音便形は共時的な記述方法を考えるにしても、その歴史的な成立事情との整合性を考慮する必要があり、さらに音便形の成立には、日本語における二重母音や撥音・促音・長音の成立が大きく関わっているところから、音韻史にも目配りしてゆかなければならない。

・「アクセント活用」について：

孤立した東京式アクセントの地域について、周辺地域を詳しく調査してゆくことでその成立過程を明らかにしてゆく必要がある。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕(計1件)

屋名池誠「文法論と語彙」

（斎藤倫明・石井正彦編『これからの語彙論』
ひつじ書房 97～112 ページ） 2011 年

6．研究組織

(1)研究代表者

屋名池 誠 (YANA I KE MAKOTO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00182361